

やれやあ引、さの、せえい、せえい、せええい、
 三浦三崎は女の夜業、男後生樂寢てまぢる、
 ようい、ようい、よやさのせえい。
 ええ、そりや、なあ、
 秋が来たぞよ、三崎諸磯の段々畑から百舌が出たで、
 えええ、や、ほろほにや、や、ほろほ、
 くるくるいろいろにや、くるるうにや。
 やあれ、日はよし、地はよし、海や風ぐし、
 今年や豊年歳、穂に穂が咲いた、
 やあれ、テケテケ、チャンチキ、チャンチキナ、
 ありやりや、こりやりや、これわいさのせえい。
 五郎作よ。太郎兵衛よ、李十よ、ちよいと來なせ、
 丘や畑は萬作じや、おや、俺ちの陸穂もやつと熟れた。
 やれ、南瓜も飛び出せ、午勞も踊り出せ、

枝豆、隠元、ささぎ豆、
 なた豆、落花生に胡麻の種、
 茨がはぢけた、赤ちやけた、
 化猫、雄猫、かま鮎、粟が尻尾を黄に垂れた。
 稗は眞黒、眞黒、くろんほ、玉蜀黍や赤髯、赤髯毛唐人
 が股くら毛。
 蜻蛉がからんだ、蝨がせ、栗鼠が駈け出す、鳶がせ、
 お薯もころけ出せ、馬鈴薯、里芋、つくね芋。
 子を生め、子を生め、山の芋。
 こちのお鼻もどんと殖せ、
 俺ちも壯健で、うんと肥せ、
 種蒔け、種蒔け、蒔かすにやるられぬ、蒔かねば憂さや
 の、子種はどつさり、畑は上々で、畝高で、
 水もよくきく、肥料もよくきく、

種蒔け、種蒔け、づんと殖せ、
 そこら一面鋤いて返せ。
 子をうめ、子をうめ、土の芋。
 やれ、その子は誰が子だ、俺が子だ、
 汝ちの畑にできた子だ、
 それでも誰が子か知んねえだ、
 麥だか、粟だか、芋だか、稗だか、子種はどつさり、畑
 はひとつよ、
 誰が子でもよかんべ、出来た子は俺が子。
 やあれ、なあ、三崎やよいとこ、女の夜業、
 ええ、風にやええ、風にや鱧釣り、夜中は寝まる、
 たまに風吹きや畑うち、
 うんとこしよ、どつこいしよ、
 惚れたその時や命もいらぬ、

いやで別れりや離れよとままよ、
 翌の晩にはまたできる、
 おおさ、やれ、やれ、三崎よいとこ、男の後生業、
 子を生め、子を生め、土の芋。
 やあれ、曳け、笛吹け、鉦うてよ、
 太鼓どんどと打つて囃せ、
 子供は眞つ先、地主どんの音頭で、
 花笠そろへた、團扇をそろへた、よいと曳けよ、
 お婆も来、お唄も後押せ、
 畑の眞中、お囃子や、チャンチキ、チャンチキ、
 浮かれてくはしやいで食べ酔うて、
 而も生眞面目で泣いて通る。
 やあれ、曳け、山車よ曳け、海が見ゆる、
 沖はええ、沖はてるてる、風車は廻る、磯の神明様の片

時雨

ようい、ようい、よういとなあ、
ええ、そりや、退した、
お巡査さんが逃げ出す、
神主さんも笑ひ出す、
支える、支える、松の木に、木槿も邪魔だよ、
切ろやれ、捨よやれ、やあ、
蜻蛉がからんだ、螽蟴がせ、粟鼠が駈けだす、鳶がせ、
お薯もころげ出せ、馬鈴薯、里芋、つくね芋、
子を生め、子を生め、山の芋、
南瓜も飛び出せ、午夢も踊り出せ、この冥加えな、
あれわいせの、これわいせの、この冥加。
さあさ、浮いた。浮いた。

百姓唄

逢ひたかんべ、見たかんべ、添つたらよかんべ、
家に知れたらやかましかんべ、
世間がわるかんべ。
おさ、やれ、やれ。
何だつべこべ、惚れたがどうしただ、
家で知つたちゆて添はずにやをかねえだ、
世間か何だんべ。
おさ、やれ、やれ。

草の葉つば

草の葉つばは風吹きや戦ぐ、
地からしんしん揺り動く。
一切合切投げいだせ、
私ももとより泣き上戸。

草の葉つばは雨降りや生きる。
地までさんざと濡れしとる。
一切合切つぶ濡れだ、
私ももとより一途もの。

草の葉つばは日が照りや躍る、

地から底から泌み光る。
一切合切照りかへせ、
私ももとより命がけ。

三浦三崎

その日ぐらしの山樵が
斧鉞かついでたゞ涙。
通草も眞赤にはちきれた、
鳥もケンケン飛んでゆく、
うんとこどつこい、よいとこな、
急いで下りなきや日が暮れる。
うんとこどつこい、よいとこな。

朝は元氣な船頭衆も
夕日が轉がりや空矢聲。
浮氣な沙魚めにや逃げられる。
漕いでも漕いでも波の上、
えんやらほいほい、えんやらほい、
急いで上らにや子が喚く、
えんやらほいほい、えんやらほい。

郵便飛脚は命がけ、
いつさん走りに、豆畑、
三浦三崎にや燈がついた。
小便する間も氣が揉める、
えつさつさ、えつさつさ、
急いで駈けなきや首が切れる、

えつさつさ、えつさつさ。

城ヶ島の娘

むすめ、むすめ、城ヶ島の娘、
おまへは裸で海のそこ、
朝も早うから海のそこ、
素足ちらちら、真逆様に
波を潜れば、青波ばかり。

むすめ、むすめ、城ヶ島の娘、
鮑取ろとて海のそこ、
潜水眼鏡で波のそこ、
あちらこちらといのちをちぢめ、

泳ぎ廻れど青波ばかり。

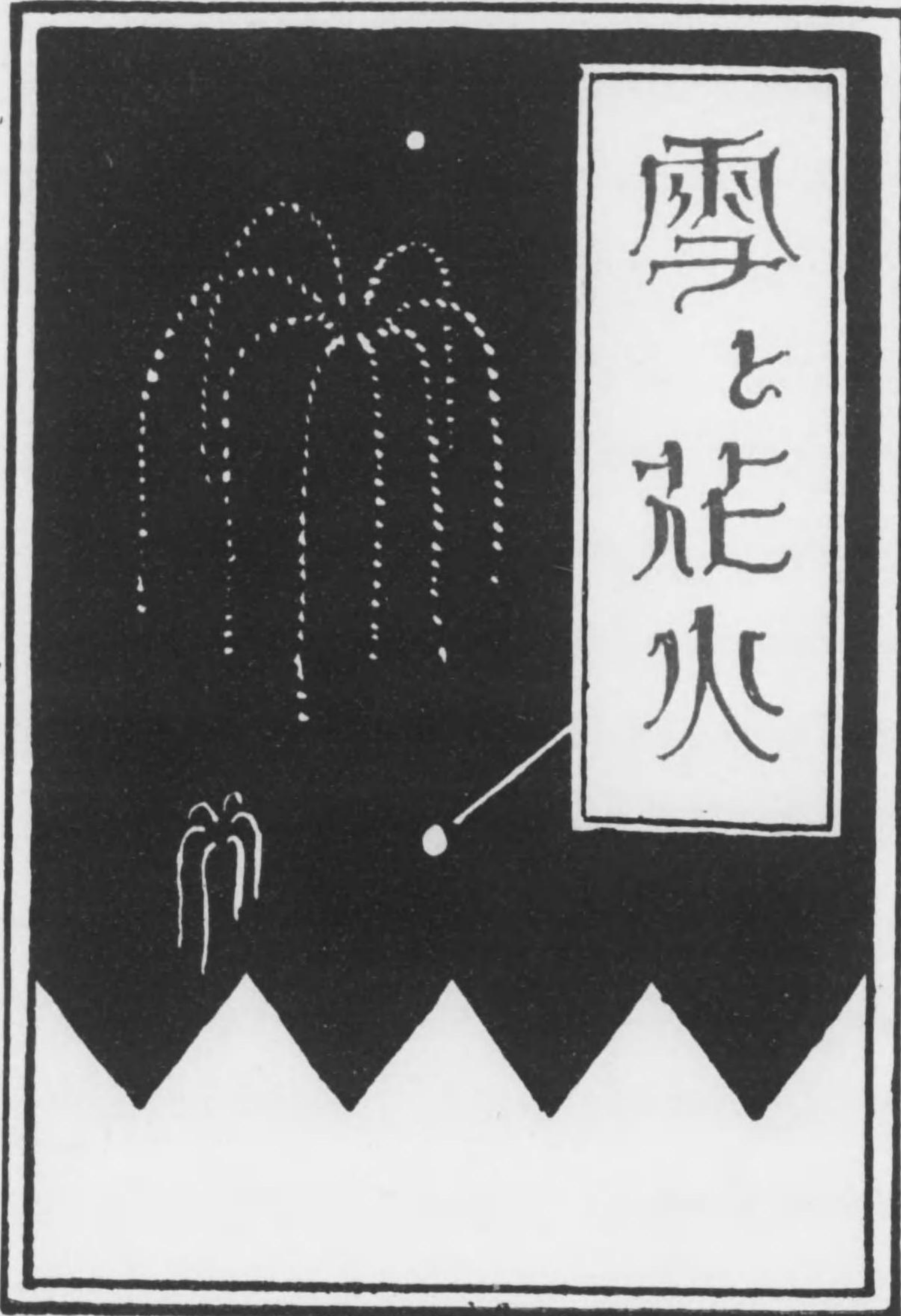
むすめ、むすめ、城ヶ島の娘、
海はしんしん、おへそはひえる。
息がつまれど波のそこ、
岩にべつたりしがみつく、
しがみついても青波ばかり。

むすめ、むすめ、城ヶ島の娘、
さぞや痛かる、虎魚の針に、
足を刺されて、揺りあけられて、
浮いて上れど青波ばかり、
前もうしろも青波ばかり。

むすめ、むすめ、城ヶ島の娘
おまへは裸で海のそこ、
波にや揉まれる、生活はたたず、
鮑取るとて潜つて見たが、
鮑取らいで子ができた。

城ヶ島の雨

雨はふるふる、城ヶ島の磯に、
利休鼠の雨がふる。
雨は眞珠か、夜明の霧か、
それともわたしの忍び泣き。
舟はゆくゆく通り矢のはなを、
濡れて帆あけたぬしの舟。



塵と花火

ええ、舟は櫓でやる、櫓は唄でやる。
唄は船頭さんの心意氣。
雨はふるふる、日はうす曇る。
舟はゆくゆく、帆がかすむ。

東京夜曲



公園の薄暮

ほの青き銀色の空気に、
そことなく噴水の水はしたたり、
薄明ややしほしさまかえぬほど、
ふくらなる羽毛頸巻のいろなやましく女ゆきかふ。

つつましき枯草の濕るにほひよ……

圓形に、あるは楕圓に、
割られし園の配置の黄にほめき、露に三つ四つ
色淡き紫の弧燈したしけに光うるほふ。

春はなほ見えねども、園のこころに

いと甘き沈丁の苦き苔の
刺すがごと沁みきたり、瓦斯の薄黄は
身を投げし靈のゆめのごと水のほとりに。

暮れかぬる電車のきしり……
涸れたる調和にぞ修道女の一人消えさり、
裁判はてし控訴院に留守居らの點す燈は
疲れたる硝子より弊私的里の腫を放つ。

いづこにかすすろげる春の暗示よ……
陰影のそここに、やや強く光劃りて
息ふかき孤燈枯くさの園に歎けば、
面黄なる病兒幽かに照らされて迷ひわづらふ。

朧けのつつましき匂のそらに、
なほ妙にしだれつつ噴水の吐息したたり、
新しき月光の沈丁に沁みも冷ゆれば
官能の薄らあかり銀笛の夜とぞなりぬる。

鶯の歌

なやましき鶯のうたのしらべよ……
ゆく春の水の上、靄の廂合、
凋れたる官能の、あるは、青みに、
夜をこめて靈の音をのみぞ啼く。

鶯はなほも啼く……瓦斯の神經
醜のごと鐘えて顫ふ薄き硝子に、

失ひし戀の通夜、さりや、少女の
青ざめて熱視めつつ悶くる腫に。

憂鬱症の靈の病めるしらべよ……
コルタアの香の屋根に、船のあかりに、
朽ちはてしおはぐるの毒の面に
愁ひつつ、にほひつつ、そこはかとなく。

ギオロンの三の絃摩るころか、
ていほろと梭の音たつるゆめにか、
寝ねもあへぬ鶯のうたのそそりの
かつ遠み、かつ近み、静ころなし。

夜もすがら夜もすがら歌ふ鶯……

月白き芝居裏、河岸の病院、
なべて夜の疲れゆくゆめとあはせて、
ウ井スラア一の靄の中音に鳴き鳴きてそこはかとなし。

夜の官能

濕潤ふかき藍色の夜の暗さ……
酸のごとき星あかりさだかにはそれとわかねど
濃く淡き溝渠の陰影に、
青白き胸衣會社のかにほひ、
窓多く、而もみな閉したる眞四角の煙艸工場の
煙突の黒みより灰ばめる煤と湯氣なびきちらほふ。

桶のもと、暗き沈黙に

舟はゆく……
なごやかにうち青む砥石の面を
いと重き剃刀の音もなく迂るごとくに、
舟はゆく……ゆけど聲なく
ありとしも見えわかぬ棹取の杞憂深げに、
ただ黄なる燈火ぞのほりゆく……孤兒の頼りなき眼か。

つつましき尿の香のしみ入るほとり、
腐れたる酒類の澱み濁りて
そここの下水よりなやみしみたり、
白粉と湯垢とのほめく闇にも
青き芽の春の草かすかにほふ。

濕潤ふかき藍色の夜の暗さ……

かへりみすれば

いと黒く、はた、遠き橋のいくつの

そのひとつ青うきしろひ、

神經の衰弱にぞ絶間なく電車過ぎゆき、

正面なる新橋の天鵝絨の空の深みに

さまざまの電気燈の裝飾、

それを脱けて紫の弧燈のほやかにひとつ濡れる。

あはれ、あはれ、爛壞のまへの官能のイルミネーション。

しはあれども、

濕潤ふかき藍色の夜の暗さ……

溝渠の闇の中病院の舟は消えゆき、

青白き袍衣會社にほふあたりに、

整はぬ鶯ぞしみらにも鳴きいでにける。

片戀

あかしやの金と赤とがちるぞえな。

かしたれの秋の光にちるぞえな。

片戀の薄着のねるのわがうれひ

「曳舟」の水のほとりをゆくころを。

やはらかな君が吐息のちるぞえな。

あかしやの金と赤とがちるぞえな。

露臺

やはらかに浴みする女子のにはひのごとく、

暮れてゆく、ほの白き露臺バルコニーのなつかしきかな。
黄昏たそがれのとりあつめたる薄明うすあかり

そのもろもろのせはしなきどよみのなかに、
汝なは絶えず來る夜よのよき香料をふりそそぐ。
また古き日のかなしみをふりそそぐ。

汝ながもとに兩手もゝてをあてて眼病めびょうの少女はゆめみ、
鬱金香いんげんかうくゆれるかげに忘れし人もささやく、
げに白き椅子いすの感觸かふくはふたつなき夢ゆめのさかひに、
官能くわんねいの甘き頸うなじを捲まきしむる悲愁かなしみの腕うでに似たり。

いつしかに、暮るとしもなき窓あかり、
七月しちがつの夜よの銀座ぎんざとなりぬれば
静しずころなく呼吸いきしつつ、柳やなぎのかげの

銀緑ぎんりょくの瓦斯ガスの點とちりに汝なもまた優やさになまめく、
四輪車しりんしゃの馬うまの臭氣におひのただよひに黄きなる夕月ゆづき
もの甘あまき花はな梔ゆい子の薰かほしてふりもそそげば、
病いめる兒このころもとなきハモニカも物語ものがたりのなかに起おりぬ。

S 組合の白痴

雜艸園

惱ましき黄の妄想の光線と、生物の冷き愁と、——
 靈の雜艸園の白日はかぎりなく傷ましきかな。
 たとふればマラリヤの病室にふりそそがれし
 香水と消毒劑と、……窓の外なる蜜蜂の巢と、……
 そのなかに絶えず恐るる弊私的里の看護婦の眼と、
 霖雨後の黄なる光を浴びて蒸す四時過ぎの歎に似たり。

見よ、かかる日の眞晝にして
 氣遣はしげに黠りたる瓦斯の火の病める腫よ。

かくてまた踏み入りがたき雜艸の最も淫れしあるものは

肥満りたる、頸輪をはづす主婦の腋臭の如く蒸し暑く、
 悲しき莖のひと花のべんべん草に縋りしは、
 藥瓶もちて休息める雜種兒の公園の眼をおもはしむ。
 また、緩やかに夢見ることあるものは、
 午後二時ごろのCircusのあるごとく、
 ことに憎きは日光が等閑になすりつけたる
 恐ひもかけぬ、物かげの新しき土の色調。
 またある草は白猫の柔毛の感じ忘れがたく、
 いとふくよかに温臭き残香の中に吐息しつ。
 石鹼の泡に似て小さく、簇り青むある花は
 ひと日浴みし肺病の女の肌を忍ぶごとく、
 洋妾めける雁來紅は
 吸ひさしの巻煙草めきちらほひてしみに蒸ゆる
 朝顔の萎みてちりし日かけをば見て見ぬごとし。

見よ、かかる日の眞晝にして
氣遣はしげに睨ける瓦斯の火の病める瞳よ。

あるものは葱の畑より忍び來し下男のごとく、
またあるものは轢かれむとして助かりし公證人の女房が
甘蔗のなかに青ざめて佇むごとき匂しつ。
ことに正しきあるものはかかる眞晝を
饜え白らみたる烏屋の外に交接へる鶏をうち目守る。

噫、かかるもろもろの匂のなかにありて
藥草の香はひとしほに傷ましきかな、
哀れ、そは三十路女の面もちのなにとなく淋しきごとく、
活動寫眞の小屋にありて悲しき銀笛の音の消ゆるに似た

り。

見よ、かかる日の眞晝にして
氣遣はしげに黄ばみゆく瓦斯の火の病める瞳よ。

あはれ、また
知らぬ間に懶きやからはびこりぬ。
ここにこそ恐怖はひそめ。かくてただ盲人の親は寢そべ

剃刀持てる白痴兒は匍匐ひながら、
こぼれたる牛乳の上を、毛氈を、近づき來る思あり。
またその傍に、なにとも知れぬ匂して、
詮すべもなく降りゆく、さあれ楽しくおもしろき
やぶれかかりし風船の籠に身を置く心あり。

あるは、また、かげの濕地に精液のにほひを放つ草もあり。

見よ、かかる日の眞晝にして
氣遣しげに青ざめし瓦斯の火の病める腫よ。

惱ましき黄の妄想の光線と、生物の冷き愁と、
靈の雜艸園の白日の聲もなきかがやかしさを、
時をおき、揺り蕪かし、黒烟たきつけつつ、
汽車飛び過ぎぬ、かくてまたなにごともしなし……。

瞰望

わが瞰望は

ありとあらゆる悲愁の外に立ちて、
東京の午後四時過ぎの日光と色と音とを怖れたり。

七月の白き眞晝、

空氣の汚穢うち見るからにあさましく、
いと低き瓦の屋根の一圓は卑怯に鈍く黄ばみたれ、
あかあかと屋上園に花置くは雜貨の店か、

(新嘉坡の土の香は莫大小の香とうち咽ぶ。)
また、青ざめし羽目板の安料理屋の窓の内、
ただ力なく、女は頸かたむけて髪梳る。

(私生兒の泣く聲は野菜とハムにかき消さる。)
洗濯屋の下女はその時に物干の段をのほり了り、
男のにほひ忍びつつ、いろいろのシャツをひろげたり。

九段下より神田へ出づる大路には
しきりに急ぐ電車をば四十女の酔人の來て止めたり。
斜かひに光りしは童貞の帽子の角か。

かかる間も收まり難き困憊はとりとめもなくうち歎く。

その濕めらへる聲の中、
霸王樹の蔭に蹲みて日向ほこせる洋館の病兒の如く泣く
もあり。

煙艸工場の煙突掃除のくろんほが通行人を罵る如き聲も
あり。

白晝を按摩の小笛、
午睡のあとの倦怠さに雪駄ものうく
白粉やけの素顔して湯にゆくさまの藝妓あり。
交番に巡查の電話、

皮告の道化うち青みつつ火事場へ急ぐごときあり。
また間の抜けて淫らなる支那學生のさへづりは
氷室の看板かけるペンキのはこび眺むるごとく、
印刷の音の中、色赤き草花凋え、
ほどこかき外科病院の裏手の路次の門弾は
げにいかがはしき病の臭氣こもりたり。

(いま妄想の疲れより、ふと起りたる

藥種屋内の人殺、

下手人は色白き去勢者の母。)

何かは知らず、
人かけ絶えてただ白き裏神保町の眼路遠く、
肺病の皮膚青白き洋館の前を疲れつつ、

「刹那」の如く横ぎりし電車の胴の白色は一瞬にして隠れ
たり。

いたづらに玩弄品の如き劇場の壁薄あかく、
ところどころの窓の色、曇れる、あるいはやや黄なる、
弊私的里性の薄青き、あるは閉せる、

見るからに温室の如き寫真屋に晝の瓦斯つき、
(じき人おもふ哀愁はそこより来る。)

獸醫の家は家畜の毛もていろどられ、

齒科病院の帷は入齒のごとき色したり、

その真中にただひとつ、研ぎすましたる悲愁か、

冷き理髪の二階より、

剃刀の如く閃々と銀の光は瞬けり。

あらゆるものの疲れたる七月の午後、

わが瞰望の凡ての色と音と光を壓すごとく、
凡ての上のうち濕る「東京の青白き墳墓」
ニコライ堂の内秘より、薄闇き圓頂閣を越えて
大釣鐘は騒がしく靈の内と外とに鳴り響く。
鳴り響く、鳴り響く、……

心とその周囲

I 窓のそと

1

わが窓のそと、
黄なる實のおよんだんのちまめは小さな光の簇をつく

り、
葉かけの水面は銀色の静寂を織る。
白くして惱める眼鏡橋のうへを
鐵輪を走らしつつ外科醫院の兒は過ぎゆき、
氣の狂ひたる助祭は言葉なく歩み來る。

鐘を撞け、鐘を撞け、
恐ろしき銀色の鐘を……

この時、近郊を殺戮したる白人の一揆は
更にこの静かにして小さな心の領内を犯さんとし、
すでにその鎗尖のかがやきはかなたの丘の上に閃めけり。

正午過ぎ……一分……二分……三分……

日は光り、そよとの風もなし。

2

ある日、わが窓の硝子のしたに、
覆されたる蜜蜂の大きな巣激しく臭ひ、
その周囲に數かぎりなき蜂の群音たてて光りかがやき、
粗末なる木の函へすべり入り、匍ひめぐる。
かがやかしき歡喜と悲哀！
すべてこの銀色の光のなかに
たくしてむくつけき黒人の手ぞ
働ける……甘き甘きあるものを搔きいださんとするがごとく。

その前に負傷したる敵兵三人、――

あるものは白き布にて右の腕を吊したり——
日に焼けたる絶望の顔をよせて
そこはかとなきかかる日の郷愁に悩むがごとく
珍かにうち眺めたる：：足もとの黄色なる花
濕りたる土の香のさみしさに暑りつつうち潤る。

鐘は鳴る：：銀色の教會の鐘：：

硝子窓のなかには
薄色の青き眼がねをかけたる女、
かりそめのなやみにほつれたる髪かきあけて、
薬罌載せたる圓卓のはしに肱つきながら
金字見ゆるダンヌンチオの稗史を閉し、
静かなる杏仁水のほひにしみじみときき惚れてあり。

ああ午後三時の郷愁：：

II S 組合の白痴

夕まぐれ、石油問屋のS組合の入口に、
つめたき硝子戸のそと、
うち潤る石油色の陰影の中、薄ら光る銀の引手のそばに
薄白痴のわかきニキタは紫の絹ハンケチを頸にむすび、
今日もまたのんべりだらりと立ん坊の河岸の便所に凭る
るごとく、
のろまな、
その鈍き容態のいづこにか猾き眼を働らかせにやにやと
笑ひつつあり。

日は向う河岸の家畜病院の頽れたる露臺を染め、
入口の硝子戸の前に薬塗らるる色黄なる狂犬を染め、
隣れる健胃固腸丸の廣告に苦き光を残しつつ沈みゆく。

S 組合の薄白痴は
石油ににじむ赤き髪に雑種兒の矜を思ひ、
けふの夜食も焼パンにジャムと牛乳を購はんとぞ思ふ。
かかる間も白銅のこひしさに
通りすがる肥満女の葱もてる腕に倚りてうち挑む。
薄暮の河岸のあかしや、二本の河岸のあかしや、
その葉のゆめの金絲雀のごとくに散るころを、
またしてもくちすさむ、下品なる港街の小唄。
青き青き溝渠の光は暮れてゆく……

わかきニキタはほんやりと薄笑しつつ……
十月の枯草の黄なるかがやき、そがかげのあひびきの
浮つきし聲のかすれを思ひいで、
また外光の紫に河岸の燕の飛び翔りながら隙見する
瞳青きフランス酒場の淫れ女が湯浴のさまを思ひやり、
あるはまた火事ありし日の夕日のあたる草土堤に
だらしなく擁へ出されて薫りたる淡黄の、赤の乳緑の、
青の、沃土の、
催笑劑や泣藥、痲痺劑や惚藥、そのいろいろの音樂の囀。
さて組合の禿頭のトムソンが赤つちやけたる鹿爪らしき
古外奪ををかしがり、
恐ろしかりし夏の日のこと、どくだみの臭き花のなかに
「キ……ン……タ……マ……が……い……た……いと

白粉厚き皺づらに力なく吸り泣きつつ、
終に斃れし旅藝人のかつほれが臨終の道化姿ぞ目に浮ぶ。

今瓦斯點きし入口の撻押しあけて
石油の臭新らしく人は去る、流行の背廣の身がるさよ。
いつしかに日は暮れて河岸のかなたはキネオラマのごと
く燈點き、
吊橋の見ゆるあたり黄なる月嚙喰と音も高く出でんとす
れど、

あはれなほS組合の薄白痴のらちもなき想はつづく……

III 泣きごゑ

わが寝ねたる心となりに泣くものあり——

夜を一、乳をさがす赤子のごとく、
光れる釣鐘草のなかに頬をうづめたる病兒のごとく、
あるものは「京終」の停車場のサンドウ井ツチの呼びご
ゑのごとく、

黄にかがやける枯草の野を幌なき馬車に乗りて、
密通したる女のただ一人夫の家に歸るがごとく、

けにけにあるものは大蒜の畑に狂人の笑へるごとく、

「三十三間堂」のお柳にもまして泣くこゑは、

ネル着けてランプを點す横顔のやはらかき涙にまじり、
理髪器の銀色ぞやるせなき囚人の頭に動く。

そのなかに肥満りたる古寡婦の豚ぬすまれし驚駭と、

窓外の日光を見て四十男の神官が
死のまへに啜泣せるつやもなく怖しきこゑ。

ああ夜を一夜、
わが寝たる心のとなりに泣くもののうれひよ。

IV 銀色の背景

わが悲哀の背景は銀色なり。
それは五月の葱畑のごとく、
夏の夜の「若竹」の銀襖のごとく青白き瓦斯に光る。

そのまへに、
弊私的里の甚しき
私通したる泊美藍色の女の
聲もなき白痴の兒をば抱きながら入日を見るがごとくに
歩み、

かの苦く青くかなしき愁夜曲……

ある夜のわれは恐ろしくして美しき竹本小土佐の
合邦の玉手御前の悲歎をば彈語する風情に坐り、
暗き暗き鬱悶は
鈍銀の引かれゆく幕の前に、指組める「仁木」のごとく
隈青き眼の光烟とともにスツボンの深き恐怖よりせりあ
がる……

何時も何時もわが悲哀の背景には銀色の密境ぞ住む。
そのなかに鳴きしきる蟲の音よ、
句高き空気の迅き顫動、
太棹と、鋭き柏子木、
ああああわが凡の官能は盲ひんとして靜かに光る。

V 神経の凝視

日は暮るる、日は暮るる、力なき鬱金の光……
 ゆき馴れし一本の楡のもと、半壊れし長椅子に、
 恐ろしき病室を抜けいでたるわがこころの
 神経の疑ふかき凝視……

足もとの、そここの小さき花は
 長く長く抱擁したるあとの黄色なる興奮に似て
 光り……なげき……吐息し……
 沈黙したる風は
 生前の日の遺言状の秘密のごとくに刺草の間に沈み、

美しくき絶望のごとたまさかに蜥蜴過ぎゆく。

近郊の鐘は鳴る……修道院晚餐の鐘……

神経の澄みわたる凝視はつづく——

その青くして何物にも吸ひ取らるるがごとき瞳は
 身をすりよする異母妹の性の恐怖より逃れんとし、
 親しき友人の顔に陋しき探偵の笑を恐れ、
 色黄なる醜き悪縁の女を殺さんとし、
 さらにわが生を力あらしめんがために砒素を醫局の棚よ
 り盗み、
 終にまた響も立てぬ靈の深緑の腫にうち吸はれ、
 わが心の深淵に突き落されし處女の銀の咽びをきく。

この時、病院の青白き裏口の戸に佇める看護婦は、
 携へし鳥籠の青き小鳥の鳴くこゑをさびしみながら、
 角吹ける乗合馬車の遠き遠き黄のかがやきをなつかしむ。

日は暮るる、日は暮るる、力なき鬱金の光……

物理學校裏

Borun. Bromun. Calcium.

Chromium. Manganum. Kalium. Phosphor.

Barium. Iodium. Hydrogenium.

Sulphur. Chlorum. Strontium……

(寂しい聲がきこえる、そして不思議な……)

日が暮れた、淡い銀と紫——

蒸し暑い六月の空に

暮れのこる棕梠の花の惱ましさを。

黄色い、新しい花穂の聚團が

暗い裂けた葉の陰影から噎せる如に光る。

さうして深い吐息と腋臭とを放つ

齒痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉つほい亢奮の黄。

$C_2H_5O_2N_2 + NaOH = CH_4 + Na_2CO_3 \dots$

蒼白い白熱瓦斯の情調が曇硝子を透して流れる。

角窓のそのひとつの内部に

光のない青いメタンの焰が燃えてるらしい。

肺病院の如な東京物理學校の淡い青灰色の壁に

いつしかあるかなきかの月光がしたるる。

Tin...tin...tin.n.n.n...tin.n....

tire...ti:e...tin.n.n.n...syn....

...t...t...t...tote...tsnn...syn.n.n.n....

静かな惱ましい晩、

何處かにお稽古の琴の音がきこえて、

崖下の小さい平家の亞鉛屋根に

コルターが青く光り、

柔らかい草いきれの底に Lump の黄色い赤みが點る。

その上の、見よ、すこしばかりの空地には

濕つた胡瓜と茄子の鄙びた新しい臭が

惶ただしい市街生活の哀愁に纏れる...

汽笛が鳴る...四谷を出た汽車の Caudance が近づく

暮れ悩む官能の棕梠

そのわかわかしい花穂の臭が暗みながら噎ぶ、

齒痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉つほい亢奮の黄。

寂しい冷たい教師の聲がきこえる、そして不可思議な...

そここの明るい角窓のなかから。

Sin...Cosin...Tan...Cotan...Sec...Cosec...etc....

Icn. Dynamo. Roentgen. Boyle. Newton.

Lens. Siphon. Spectrum. Tesla の花火

攝氏、華氏、光、Bunsen. Potential. or, Archimedes. etc.

棕梠のかげには野菜の露にこほろぎが鳴き、

無意味な琴の音の稚なびた Sentiment は

何時までも何時までもせうことなしに續いてゆく。

汽笛が鳴る...濠端の淡い銀と紫との空に

停車つた汽車が蒼みがかつた白い湯氣を吐いてゐる。静かな三分間。

惱ましい棕梠の花に官能に、今、

蒸し暑い魔睡がもつれ、

暗い裂けた葉の縁から銀の憂鬱がしたたる。

その陰影の捕促へがたき Passion の色、

齒痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉つほい亢奮の黄。

Neon. Flourum. Magnesium.

Natrium. Silicium. Oxygenium.

Nitrogenium. Cadmium or, Sibirium

etc., etc.....

骨なし兒と黒猫

そは恐ろしきXなり。淫らにして不倫なる母のごとく、
汝が神経と知覺とは痛ましきほど慄けども、力なき骨なし

し兒よ。

終日、わづらはしき病室の白葡萄酒の如き空氣に呼吸し、
靈のうつらぬ瞳は唯狂ほしき硝子戸の外をうち凝視む。

そが背後の棚の上、やや青みたる陰影の中、

ニツケルの産科の器械鷺のごとき囁して光り、

薄く曇れる硝子のなかにとりあつめたる薬剤の罫、

その青く赤くおほめける劇薬のエチケツテ……鋭く、
苦し。

あ、あ、骨なし兒よ。この薄暮の反射に、
柔らかなにして惱ましき汝が衾は銀の潤澤に光れど、
冷やかなる鐵の寢臺の上、据ゑられし木造の函は、
汝が身を入れたる小さき牢獄は山葵色の曇にうち歎く。

大人びたる顔の白き白き白粉の恐ろしさよ。

なよよと凭せたる身體のしまりなさ。
靈の青さ、いたましき、
生温るき風のごと骨もなき手は動く——その空に鋪銀の
鐘はかかれり。

ああ、ああ、今しがたまでぞ、この硝子戸の外には
五時ごろの口の光わかわかしき血のごとくふりそそぎ、

見えざる窓下のあたりより、
抑えあへぬ抱擁の笑ひ聲きこえしか——葱畑すでに青
し。

鋪銀の鐘よりは一條の絹薄青く下りて光る。
その端をはづかに取りたる手は、その瞳は、
ああ、すべて力なし。——さらにさらに痛ましきはかかる
青き薄暮の激しき官能の刺戟。

聴け、遂に、彼は泣く。……
あらず、それは馴染みたる黒猫なりき。ふくらなる身を跳
らせて、
銀色の衾の裾にのほりつつ背を高めたる。
黄ばみたる青葱色の眼の光來る夜の恐怖にそそぐ。

かくてただ聲もなし。青く光る硝子戸に眞白なる顔ふり
 哀樂の表情もなく親しげに畜類の眼と並びつつ何をか凝
 視む。
 ああ、暗き暗き葱畑の地平に黄なる月いでんとして、
 鐘の鐘は鳴る：：：幽かに：：：幽かに：：：やるせなき靈
 の求めもあへぬ郷愁。

雪ふる夜のころもち

今夜も雪が降つてゐる。……

Bine devils よ。

酔ひ狂つた俺の神経が――
 Zara…… Sara……とふる雪の幽かな瞬を聴きわけほほど――
 ひつそりと怖氣づく、ほんの一時の氣紛につけ込んで、
 汝はやつて来る……顔ひながら例の房のついた尖帽をか
 ぶつて、
 搔きむしつた亞麻色の髪の毛、泣き出しさうな青い面つき
 で、
 ふらふらと浮いた腰の、三尺ほどの脚根に乗つて、
 ひよつくりこつくり西洋操人形のやうにやつてくる。
 硝子の閉つた青い街を、
 濡れに濡れた舗石のうへを、
 ピアノが鳴る：：：金色の顫音の
 潤むだ夜の空氣に緑を帯びて消えてゆく。

雪がふる。……
 濕つた劇薬の結晶、
 アンチピリンの、(頓服剤の) 粉末のやうに――
 それがまた青白い瓦斯に映つて
 弊私的里の發作が過ぎた、そのあとの沈んだ氣分の氛圍
 氣に
 落ちついた悲哀の斷片がしみじみと降りしきる。

そのとき
 酒場の薄い碓子から
 むちやくちやになつた神経が、馬鹿にしろといふ調子で、
 それでも沈まりかへつて、
 恐怖と可笑の眼を腫つたまま、

ふる雪を、

Blue devils の歩行を眺めてゐる。

ひよつくりこつくり顫へてゆく……

ピアノに合せた足どりの、ふらふらと兩手を振つて、あ

かしやの禿けた並木をくぐりぬけ、

三角形の街燈の鐵の支柱によるけかかつて腰をつき、

そそくさと、そそくさと、内隠から山葵色の蠟を取り出
 し、

こくこくと仰向いて、苦さうな口のあたりに持てゆく。

雪がふる……白く……薄青く……

それが蠟を收つて

ひよいと此方を見る。

涙の一杯たまつた眼に
張のない痲痺しきつた笑を洩らしながら、
克明な靈のかたわれが
ひよつくりこつくり道化した身振に消えてゆく。

ああ、静かな夜、
何處かに幽かに杏仁水のにほひがして
疲れた官能が痺れてくる……

濡れたあかしやが銀の恐怖に光つて、
一ならば青い硝子に反射する——そのほかは
聲もせぬ通の長い舗石のうへを
痺れて了つたピアノの顫音が、
ふる雪の断片が、

活動寫眞のまたたきのやうに
音もなく瓦斯の光に顫へてゐる。

雪がふる。

Sara……Sara……Sara……Sara……Sara……

薄ら青い、冷たい千萬の断片が

落ついた悲哀の光が、

弊私的里の發作が過ぎた、そのあとの沈んだ氣分の氣圖

氣に、
しんみりとしたリズムをつくつて
しづかに降りつもる。

Sara……Sara……Sara……Sara……Sara……

解雪

わが憂愁は溶けつつあり、
黄色く赤くみどりに、
屋根の雪は溶けつつあり、
光りつつ、つぶやきつつ、滴りつつ……

日はすでにまぶしく、
菓子屋の煙突よりは煙のほり、
病犬は跛曳きつつ舗石をゆく、
そのなかに溶けつつあるものの小歌。
やはらかにかよわく、ほそく、

そは裁縫機械のごとく幽かに、
いそがしく、
さまざまの光を放ちつつ滴る。

喪心のたのしさを聴け。
薄暗き地下室の厨女よ、
湯沸の湯気の呼吸も
玉葱のほとりにしづごころなし。

丸の内の三號、
その高き煉瓦より、寛より、また廂より、
かくれたる物の芽に沁みたる無数の寶玉の溶解、
温かに劇薬のながれ濕る音楽……

青
い
髯

わが憂愁は溶けつつあり、
黄色く、赤く、みどりに、
屋根の雪は溶けつつあり、
光りつつ、つぶやきつつ、
滴りつつ……

青い髯

五月が来た。
 硝子と乳房との接觸……桐の花とカステラ……
 春と夏との二聲樂、冷めたい冬……
 とりあつめた空氣の淡い感覺に、
 硝子戸のしみじみとした汗ばみに、
 さうして、私の刺りたての青い面の皮膚に、
 黄緑の Passion を燃えたたせ、顫はす
 日光の痛さ、
 その眩しい音樂は負傷兵の鳴らす釣鐘のやうに、
 恢復期の精神病患者がかぎりなき悲哀の Irony に耽けるや

うに、
 心も身體も疲らした
 その翌日の私の弱い臉のうへに、
 キラキラとチラチラと苦い顫音を光らす、
 強く絶えず、やるせなく……

午前十一時半、
 公園の草わかばの傷みに病犬の黄い奴が駆けまわり、
 禿けた樹木の梢がそろつて新芽を吹く、
 螺旋状の臭のわななきと、底力のはづみと、
 Whiskey の色に泡だつ呼吸がかひと……
 而して、わかい男の刺りたての面の皮膚の下から
 青い髯が萌える……

五月が来た。
 どこかしらひえびえとした微風が
 閃めく噴水の尖端からしづれて、
 ニホヒイリスや和蘭陀薄荷のしめりを戦がせ、
 ぢつと、私が凝視する、
 小酒杯の透明な無色の火酒を顔はし、
 黄緑の外光を浴びた青年の面のうへを、
 なめらかに砥石のやうな青みを、
 Poの頬のやうな手さはりを、
 すいすいと剃刀のやうに觸れる、
 私は無言で冷たい小酒杯をとりあげ、
 しみじみと赤い唇にあてる……

五月が来た、五月が来た。
 楠が萌え、ハリギリが萌え、朴が萌え、篠懸の並木が萌
 える。

そうして、私の

新しいホワイトシャツの下から青い汗がにじむ、
 植物性の異臭と、熱と、くるしみと……

芽でも吹きさうな身体のだらけさ、

(何でもいいから抱きしめたい。)

萌える、萌える、萌える、芍薬、

青い髯が

ウオツカの沁み込む熱い頬の皮膚から萌える……

くわつとふりそそぐ日光、
 冷たい風、

春と夏との二聲樂、……緑と金……

五月

新しい烏龍茶と日光、
滋味もつた紅さ、
湧きたつ吐息……

さうして見よ、
牛乳にまみれた喫茶店の猫を、
その猫が惱ましい白い毛をすりつける
女の膝の弾力。

夏が来た、
静かな五月の晝、湯沸からのほる湯気が、

紅茶のしめりが、
爽かな夏帽子の麥程に沁み込み、
うつむく横顔の薄い白粉を汗ばませ、
而してわかい男の強い體臭をいらだたす。
「苦しい刹那」のごとく黄ばみかけて
痛いほど光る白い前掛の女よ。
「烏龍茶をもう一杯。」

銀座花壇

赤い花、小さい花、石竹と釣鐘艸、
かなしくよるべなき無智……

瓦斯の黠いた
勸工場のはいりくち、
明るい硝子棚、紗の日被、
夏は朝から惱ましいのに
花が咲いた：：あはれな石竹と釣鐘草。

わかい葉柳の並木路、撒水した煉瓦道、

そのなかの小さな人工花壇、
(疲れた瞳の避難所)

その方二尺のかなしい区劃に、
夏がきて花が咲いた、小さい細い石竹と釣鐘草。

絶えず絶えず電車が通る：：
おしろい汗を吹く草の葉に、

裁縫器の幽かな音に、
よせかけた自轉車の銀のハンドルの反射
日は光り、

かるい埃が薄い車輪をめぐる：：
赤い花、小さい花、石竹と釣鐘草。

さうして女がゆく、
すすしい白のスカート
その手に持った赤皮の瀟洒な洋書、
異國趣味な五月が逝く：：

新しい銀座の夏、
かなしくよるべなき人工の花——石竹と釣鐘草。

六月

白い静かな食卓布、
その上のフラスコ、
フラスコの水に
ちらつく花、釣鐘草。

光澤のある粹な小鉢の
釣鐘草、
汗ばんだ釣鐘草、
紫の、かゆい、やさしい釣鐘草、
さうして噎びあがる

苦い珈琲よ、
熱い夏のところに
私は匙を廻す。

高窓の日被
その白い斜面の光から
六月が来た。
その下の都會の鳥瞰景。

幽かな響がきこゆる、
やはらかい乳房の男の胸を抑へつけるやうな……
苦い珈琲よ、
かきまわしながら
静かに私のところは泣く……

新聞紙

一九一〇、六月、はじめの月曜、
冷めたい朝の七時、
つつましい朝の七時、
ただひとり爽やかに折るかへす新聞紙の
緑の薄い反射……

微かな鐵分をふくんだ空気に
まだ青味を帯びた棕櫚の花が
かよわい淡黄色に光り、
ちらほらと夏帽子の目につく
なつかしいだらだら坂の下

II 分署の前の通……せはしい電車の鐸……

撒水夫の唧筒を動かすさびしさ、
濠端の火の消えた瓦斯燈に
白マンストルが顔へ、
その硝子の一點に日光の金が光つてる。

わかい駈者は
窓のないカキ色の囚人馬車を
梧桐のかけにひき入れたまま、
しづかに読み耽る……

短く刈つた栗毛の光澤から沁み出る

臭の奇異な汗ばみ、その上にさしかくる
新聞紙の新しい觸感、
わか葉の薄い緑の反射。

新しい客を待つ間、
やすらかな五分時が過ぎゆく……

畜生

やはらかにかなしきは畜生の
こころなれ。

赤き日はアカシヤのわか葉にけぶり、
蒜肉の黄なる花ちらちらと噎ぶとき

怖々と投げいだし、眠りたる靈の

人間の五官にもわきがたきいと深きかなしみ……

そのゆめはこころもち汗ばみて

傷つきし銀毛の耳に

痛き花粉は沁み、

やるせなき肉體の憂鬱に

柔かにかろく魔さるれど、

汝が母を犯したる

靈の不倫をば知るよしもなし。

五時過ぎて暮ちかき夏の日は

血に染みし呼鈴の聲のごとくふりそそぎ、

嬾やかなる風は蜜蜂の褐色に、

蜜蜂のつぶやきは

かろく花粉を落す。

汝が微かなる寢息は

腐れたる玉葱のほひにも沁み、

快く荒みゆく性の秘密にや笑ふらん。

匍ひよりし毛蟲の奇異なる縁にも

汝は覺めず……

ひとみぎり園丁の鎌の刃はかなたに光り、
堀りかへさるる土の香の濕潤吹き來る。

あはれ、かかる日に病みて伏す

やはらかにかなしき畜生の

捉へがたき微温の、やるせなきそのこころ……

隣人

隣人は露西亞の地主のごとく、

素朴な黒の上衣に赤木綿のバンドを占め、

長靴を穿き、

禿けた頭のきさくから他の畑を見回る。

隣人はよく蠶豆のなかに立ち

雨に濡れた黄花蒜肉を眺める。

* Ogamudashi, Mauseke : 自慢らしい手つきで

啣えたパイプの雁首をほんとはたく。

隣人は見え坊だ、そりばつてん、

どうかすると吝嗇漢だ、
世界苦の氣鬱から、
馬鈴薯を喰べすぎた食傷から。

隣人は女房を恐れる、長崎うまれの
肥満女の息の臭い、馬鹿力のある、
それでよく小娘のやうにかぢりつく、
牛肉と晝寢の好きな飲酒家。

隣人は日に一度黒い蒸汽をながめる、
その悲しい面に泊芙藍のやうな
黄いろい日が光り、涙がながれる。
さうして悄然と御燈明をあけにゆく。

隣人の宣教師、混血兒のベンさん
氣まぐれな禿頭、
青い眼鏡をかけては街を歩行き、
日曜の日には御説教。

Changhang-deki no Mariya Sanna

Ne wa yasuka-batten,

utsukushikaken,

Minasan yō ogan de wokinasare.”

* お精がでます、茂助。

雨の氣まぐれ

雨はふる。…雨はふる…

やるせない春機發動期の憂鬱病……神経の衰しい衰弱……
黄色い胃病患者の腐つた気分になりそそぐ雨。
私通した小娘の青い悪阻の秘密と恐怖とになりそそぐ雨。
泥酔漢のおくびと、殺人の温るい計畫とになりそそぐ雨。

いと、いと、いと、いと、

絶間なく雨はふる、ふりそそぐ、にじむ、曳く、消ゆる、
滴る。

わが暗い靈の霖雨季の長いひと月、

日がな終日、晝も夜も、一昨日も、昨日も、今日も
亂次ない雨はふる、ふりそそぐ、にじむ、曳く、消ゆる、
滴る。

酸っぱい麦酒のやうな氣の抜けた雨。
いそぎんちやくの液のむづかゆい雨。

微くさいインキいろの青い雨。

雨……雨……雨……

酸敗えかかつた橡の葉の纖維に蛞蝓の銀線を曳き、
臭い栗の花の白金を腐らし、

鐵粉のやうに光る芝生の土に沁み込み、
音い古池の面に怪しい笑を迂らせ、

せうことなしに雨はふる、ふりそそぐ、何時までも何時
までも小止みなく……

陰氣な微くさい雨、長い雨……日ぐらしの雨……

ともすると疲れきつた悲愁の裏から

微かな日光の金を投げかくる雨。
雨のふる廢園の木立の暗い緑色の空間。

その洞のやうな葉かげの恐怖にふりそそぐ雨。...

折から、ひよいと、花やかに
地より身軽なひるがへり、躍り出したる怪のものが
突拍子もないひと躍り、...

Kappore ! Kappore !

Amacha de Kappore !

Shiwocha de Kappore !

Yoito nai Voi ! Voi !

緋のだんだらの犬帽に戯姿の道化師が
恐ろしきほど真白く白粉つけた呆けがほ。

Oki...no...o...o,

Kura...si...no...ni...i, i,

Shira...a...Ho...Ga...miyuru,

Are...wa...Ki...no...Ku...u,u...ni,

Ha ! Yoito kono korewa no su !

Alalalalal !

Mika...n...Bu...u,u...ne...!

目も動かさず、白々と悪く澄ましたくはせ者、
燥ぎくるめく麻もの
蓄音機から絞りだす囃子——黄色な甲高の
三味の笑に挑まれて、
戯けつくした身のひねり、
突拍子もないひと躍り...

Ichi kake, Ni kake, San kake te,
Shi kake te, Go kake te, Hasyo kake te,
Kawai Okata wo....

ふいと消えたる變化もの、
白粉の濃い、手の白い、素足の白い、
唇の赤い沈黙

雨はふる：：雨はふる：：
陰氣な微くさい雨：：長い雨：：日ぐらしの雨：：
氣まぐれな不攝生のあとの痛ましい寂寥、
幻影の消え失せた雰圍氣の暗い緑に、
むづ痒ゆいやうな、氣の抜けた、さみしい、弱い、せう

ことなしの
雨はふる：：雨はふる：：本能と神經の黄昏時。

しとしと、しとしと、
絶間なく雨はふる、ふりそそぐ、葉から葉へ、しとと滴

深緑の闇い夜——ふる雨の黒いかがやき、
廢れたる橡の葉に古池に靈の底の秘密へ、
日がな終日、晝間から、今日の朝から、昨日から、遠い
日の日の夕から、
ふりつづく長い長い憂鬱の單音律、
その青い雨：：微くさい雨：：投げやりの雨：：
辛氣くさい静かな雨、かなしいやはらかな：：生温るい
計畵の雨。

雨……雨……雨……

葱の畑

寥しい靈が鳴いて居る。
そここの濕つた黒い土のなかで
幽かな、銀の調子で鳴いてゐる。

疲れた日光が
五時半ごろの重い空氣と、
湯屋の曇硝子とに、
黄色く濡れて反射し、
新しい臭のなかに弱つてゆく。

寂しい靈が鳴いてゐる。

毛なみのいい棒と白の犬が
交んだまま葱のなかにかくれてる。
細い首だけ覗いて

淀んだ瞳に
何物かを恐れてゐる。――
息がしづかに莖の尖頭を顫はす。

何處かで百舌が鳴きしきる。
疲れた、それでも放縦な
三十過ぎた病身の女らしい、
湯屋の硝子戸を出ると直ぐ

石鹼しやげんのほひする身體からだをかがめて
嬰兒あかばに小便せうべんをさしてゐる。

寥さびしい靈たましひが鳴いてゐる。……

母ははの眼めと嬰兒あかばの眼めが
一い様に白しろい犬いぬの耳みみに注そがれる。
可愛かわいいいちんほこから小便せうべんが出る。
その尿うりと、濡ぬれた西洋せうやう手拭てふきと、束そく髪はつと、
無む意味いな眼めつきと、白しろつぼい葱ねぎの青あおみに、
しみじみと黄き色いろな光ひかりがうつる。

しだいに反はん射しゃがうすれて
外ぐわい光くわうが青あおみを帯おびた。
煙えん突つから薄うすい煙けぶりがたなびき

灯あかり々の葱ねぎの尖さき頭あたまには
銀ぎん色の露つゆが光ひかりつてくる。
そしてなほ、濕しづつた黒くろい土つちのなかでは
幽ゆう寥さびしい蟲むしが、
幽ゆうかな晝ひるの調てう子しで鳴ないてゐる。

寂さびしい寂さびしい寂さびしい畑はたけ。

八月のあひびき

八月はつげつの傾かた斜しゃ面めんに、
美うつくくしき金かみの光ひかりはすすり泣なけり。
こほろぎもすすりなけり。
雜あそり草くさの緑みどりもともにすすり泣なけり。

わがこころの傾斜面に、
滑りつつ君のうれひはすすり泣けり。
よろこびもすすり泣けり。
悪終のふかき恐怖もすすり泣けり。

八月の傾斜面に、
美しくしき金の光はすすり泣けり。

秋

日曜の朝、「秋」は銀かな具の細巻の
絹薄き黒の蝙蝠傘さしてゆく、
紺の背廣に夏帽子、

黒の蝙蝠傘さしてゆく、

瀟洒にわかき姿かな。「秋」はカフスも新らしく
カラも眞白につつましくひとりさみしく歩み來ぬ。
波うちぎはを東京の若紳士めく靴のさき。

午前十時の日の光海のおもてに廣重の
藍を燻して、蟲のごと白金のごと閃めけり。
かろく冷たき微風も鹹をふくみて薄青し、
「秋」は流行の細巻の
黒の蝙蝠傘さしてゆく。

日曜の朝、「秋」は匂ひも新らしく
新聞紙折り、さはやかに衣囊に入れて歩みゆく、

寄せてくづるる波がしら、濡れてつぶやく銀砂の、
靴の爪さき、足のさき、バツチバツチと蟲も鳴く。

「秋」は流行の細卷の
黒の蝙蝠傘さしてゆく。

槍

持

おかる勘平

おかるは泣いてゐる。
 長い薄明のなかでびろうど葵の顔へてゐるやうに、
 やはらかなふらんねるの手さはりのやうに、
 きんほうげ色の草生から晝の光が消えかかるやうに、
 ふわふわと飛んでゆくたんぼの穂のやうに。

泣いても泣いても涙は盡きぬ、

勘平さんが死んだ、勘平さんが死んだ、

わかい奇麗な勘平さんが腹切つた……

おかるはうらわかい男のにほひを忍んで泣く、

麴室に玉葱の咽せるやうな強い刺戟だつたと思ふ。
 やはらかな肌さはりが五月ごろの外光のやうだつた、

紅茶のやうに熱つた男の息、
 抱擁められた時、晝間の鹽田が青く光り、

……

白い芹の花の神経が、鋭くなつて眞蒼に濁れた、

別れた日には男の白い手に硝酸のしめりが沁み込んで

た、

駕にのる前まで私はしみじみと新しい野菜を切つてゐた

……

その勘平は死んだ。

おかるは温室のなかの孤兒のやうに、

いろいろな官能の記憶にそそのかされて、
楽しい自身の愉快に耽つてゐる。

(人形芝居の硝子越しに、あかい柑子の實が秋の夕日にか
がやき、黄色く霞んだ市街の底から河蒸氣の笛がきこ
ゆる。)

おかるは泣いてゐる。
美しくしい身振の、身も世もないといふやうな、
迫つた三味に連れられて、
チヨボの佐和利に乗つて、
泣いて泣いて溺れ死にでもするやうに
おかるは泣いてゐる。

(色と匂と音楽と。)

勘平なんかどうでもいい。

雪の日

淡青い雪は
冷めたい硝子戸のそとに……

紫の御召をひきかけた
濱勇は
東の棧敷に。

薄い襟あしの白粉も見よきほどに
こころもち斜に坐つて。
うつむき加減にした横顔の

淡青い雪の反射。

四六〇

静かに曳かれてゆく暮そとの、
立三味線、

仁木の青い目ばりの凄さ。

暮れかかる東京のそらには
ほんのりと瓦斯が點き
淡青い雪がふる。

半玉は冷めたい指をそろへて、
引込の面あかりをながめ、
なにかしらさみしさうに。

淡青い雪は
冷めたい硝子戸のそとに。
……
幽かな音、幽かな色、幽かなささやき……

種蒔き

パツチパツチと鳴く蟲の
晝のさびしさ、つつましさ……
葱の畑のそこここに銀の懐中時計を閉める音。
けふも彼岸のあかるさに、
誰に見しよとか、權兵衛は
青い手拭、頬かぶり、
柵を小腕に、ひえびえと畝のしめりを踏んでゆく。
畝の光に蒔く種は

四六一

かなしみの種、性の種、黒稗の種。

バツチバツチと鳴く蟲の

晝のさびしさ、しをらしさ、……
強い日射のそこここに若いころの嘔ぶ音。

ほんに一日齷齪と

歎き足らひで、權兵衛が

青いバツチに繩の帶、
及び腰してひとすぢに土の臭を嗅いでゆく。

午後の光に蒔く種は
かなしみの種、性の種、黒稗の種。

バツチバツチと鳴く蟲の
晝のさびしさ、なつかしさ、……

黒い鴉の嘴に種をつぶれてなけく音。

若い身そらの内密事、

ひとり苦に病む權兵衛が、

歩みのろさ、手の痛さ、
腰の痛みにしみじみと明き其夜を泣いてゆく。

銀の秘密に蒔く種は
かなしみの種、性の種、黒稗の種。

バツチバツチと鳴く蟲の

晝のさびしさ、やるせなさ、……
常に啄まれて生れ得ぬ種の、嬰兒の、なけく音。

妻も子もない醜男の

何時も吝嗇い權兵衛が
貧の盗みか、一擁え
葱を伏せつつ、怖々と畝の凸みを凝視めゆく。
伏せたところに蒔く種は
かなしみの種、性の種、黒稗の種。

パツチパツチと鳴く蟲の
晝のさびしさ、おそろしさ。……
黒い眼玉が背後からちつと睨んで歩む音。

欲のつかれか、冷汗か、
鐘が唸れば權兵衛の
野暮な胸さへしみじみと、
金の入日の凌雲閣傷みながらに蒔いてゆく。

けふの恐怖に蒔く種は
かなしみの種、性の種、黒稗の種。

パツチパツチと鳴く蟲の
晝のさびしさ、情なさ。……
黒い鴉につぶされて種の凡の滅ゆる音。

忠 彌

雪はちらちらふりしきる。

城の御濠の深みどり、
雪を吸ひ込む舌うちの
しんしんと沁むたそがれに、

鳴の氣弱きよわがかきみだす
水の表面うへのささにごり、
知るや知らずや、それとなく
小石投げつけ、――
ひつそりと底のふかさをききすまます
わかき忠彌か、わがおもひ。

君が秘密の日くれどき、
ひとり心につきつめて
そつとさぐりを投げつくる
深き恐怖おそれか、わが涙――
千萬無量の瞬間ときに
雪はちらちらふりしきる。

歌うたひ

悲しいけれどもわしや男、
いやでもお酒をさがしませう、
赤いセエリイもないならば
飲んだふりして就寝やすみみませう。
みすぎ世すぎの歌うたひ。

槍持

槍やりは錆さびびても名は錆さびびぬ、
殿とのにつきそふ槍持の槍の穂尖ほきの悲しさよ。

槍は槍持、供揃、
さつと振れ、振れ、白鳥毛。

けふも馬上の寛濶に、
殿は伊達者の美しい男、

三國一の備後様、
しんととろりと見とれる殿御。

槍は槍持、銀なんぼ。
供の奴さへこのやうに、あれわいさの、これわいさの、

取りはずす、
やあれ、やれ、危なしやの、槍のさき。

槍は鏽びても名は鏽びぬ、
殿のお微行、近習まで

身なりくづした華美づくし、

槍は九尺の銀なんぼ、
けふも酒、酒、明日もまた

通ふしだらの浮氣づら、
わたる日本橋ちらちらと雪はふるふる、日は暮れる、
やあれ、やれ冷たしやの、槍のさき。

槍は槍持、供ぞろへ、
さつと振れ、振れ、白鳥毛。

雪はふれども、ちらほらと

河岸の間屋の灯が見ゆる、
さてもなつかし飛ぶ鷗、

壁のしたには廣重の紺のほかしの裾模様、

殿の御容量に、ほれほれと
 わたる日本橋、槍のさき、
 槍は擔けど、空のそら、澁面つくれど供奴、
 びんとはねたる附髭に、雪はふるふる、日は暮れる。
 やあれ、やれ、やるせなの、槍のさき。

槍は槍持、供ぞろへ、
 さつと振れ、振れ、白鳥毛。

槍は鋪びても名は鋪びぬ。
 殿につきそふ槍持の槍の穂さきの悲しさよ。
 いつも馬上の寛濶に、
 殿は伊達者のよい男、
 さぞや世間の取沙汰に

浮かれ騒ぐも女なら。
 そこらあたりの道すぢの紺の暖簾も気がかりな。
 槍は九尺の銀なんぼ、
 槍を持つ身のしみじみと、涙流すもつとめ故、
 さりとは、さりとは、供奴、
 雪はふるふる日は暮れる。
 やあれ、やれ、しよんがいな、槍のさき。

CHONKINA.

“Chonkina! chonkina!

Chun-chon kina-kina!

Chon ga nanoso de,

Cho-chon ga yoi!...”

「赤い夕日、活動寫真見たいなキラキラが、あのやうに、あれ、御覽

な。お向ふの三層樓の高い部屋の障子に、何時までも何時ま

でも照りつける辛氣くささ、寢まきや、長襦袢の、如何したんがらうねえ、まあ、

兩肌なんか脱いだり、欄干に腰かけたり、跨いだり、自墮落な、あれさ、落こつたらどうするの、氣まぐれも大概になさいなね、あれ、あの手も眞赤な狐拳！」

「Chon-aiiko ! ohon-aiiko !」

「華魁、ちよいと、御覽なさいな、

久し振で裏門が開いたと思つたら、大變ですわねえ、あれ、あんなに水が、随分しどい音だこと、

堤をもう越したんですとさ。龍泉寺、山谷、今戸のわたし、

そりやもう大變な騒よ、おやおや、まあ、素つ裸で、揚屋町の通を傳馬擔いで奔るなんて、銀ちやん、威勢がいいことねえ。」

「Chon-aiiko ! Chon-aiiko !」

「華魁、何をそんなに見てお出でなの、

くよくよとさ、
黄色いふたつの高張に
赤い日が、あのやうに射しかけて、
びちやびちやと濁水が凄いわねえ、
あら、ちよいと、そんな處で
おちんこなんか捲くるもんぢやありませんつたら、
小兒は罪が無ことねえ、ほほほ。まあ。」

“Chonkina! chonkina!

Chon-chon, ki! a-kina,

Chon ga nanoso de,

Cho-chon ga yoi,

Aiko de yoi,....

Chon-aiko! chon-aiko.....”

吉原の中店の
お職「小主水」とて、愁ひ顔の寥しい、
どうしたことやら、
白粉もまだつけぬ青いいろの、
なつかしい眼つききの女、
疲れたやうに、藍色の薄いネルを着ながして
新造と二人、
| ひとり立膝 |
華魁は灯のつかぬ五時ごろの
薄暗い角店の二重に腰かけて、
何とやら澄まぬ顔、
左の人さし指の薄繻帯に
金のいろの背後の附立が、

支那彫の唐獅子の、
冷たい光を投げかくる。
そのさだまらぬ陰影のかげの
そのなかの幽かなためいき。

“Chonkina! chonkina!...”

格子戸越しに、赤い日が
高い屋並の不思議な廂にてりかへし、
洪水の音がきこえる。
欄干では何時までも何時までも
氣まぐれな狐拳。

“Chon-aiko! chen-aiko!

Chon-chon aiko-aiko,

Uhon ga nanoso de

Oh-chon ga yoi....”

“Chonkina! chonkina!....”

鬼百合

夏の日の東京に
歌澤のころいき...

しみじみと身にしみて
きく年増、
すらりとした立姿の
中形の薄青さ、

それしやの粹なところに。

日がそそぐ……銀色のきりぎりす

浮気男を殺した

晝寢の夢の凄さ、

たてひきの憎さ、

かなしさ、つらさ、くるしさ、

日がそそぐ……わかいお七の半鐘か、死ぬるきりぎりす

銀の光の細かな強いすすりなき。

大河をまへに、

唇に啣えた帶留の金——

手をうしろにまはして、

暑さうなものごしの、
なにかしら寂しさうに、
きりきりと締め直す黒い縋子の一筋。

けだるげな三味線が
あれ、またもあのやうに……
青みもつ目のふちの疲れから
なにを見るときとなし熟視むる
黒い瞳の深さ、
酸いも甘いも噛みわけた
中年の激しい衝動……その底のさみしさ、
つらさ、かな
しさ。

黒い縋子の手ざはりが

きゆつ、きゆつと……

暑い、苦しい、くるしい日、

溢い鬼百合の赤さ、

鮮かな臭の強さ、

濕つた褐色の花粉の

細かにちる……背後の床の間の大輪。

觸る帯の縞子、やはらかな粉、

こころもきゆつきゆつと……

夏の日のさる河岸に

歌澤のこころいき。

ええまあ、
奈何すりや宜いつてんだらうねえ。

道化もの

ふうらりふうらりと出て来るは

ルナアパークの道化もの、

服は白茶のだぶだぶと戯け澄ました身のまはり、

あつち向いちやふうらふら、

こつち向いちやふうらふら、

緋房のついた尖がり帽子がしをらしや。

鉛粉眞白けで丸ふたつ

頬紅さいたるおどけづら、

圓い眼ぱりもくるくると今日も呆けた宙がへり。
 かなしやメエリイゴラウンド、
 さみしや手品の皿まわし、
 春の入日の沈丁花がどこやらに。

ひとが笑へばにやにやと、
 猫のなきまね、鳥啼き、
 たまにやべそかき赤い舌、嘘か、色眼か、涙顔。
 鳴いそな鳴いそ春の鳥、
 鳴いそな鳴いそ春の鳥、
 紙の櫻もちらちらとちりかかる。

薄むらさきの圓弧燈、
 瓦斯と雪洞、鶴のむれ、

石油エンジンことごとと水は山から逆おとし、
 臺灣館の支那の兒
 足の小さな支那の兒、
 しよんほり立つたうしろから馬鹿囃子。

ぬらりしやらりと日が暮れて
 またも夜となる、道化もの、
 あかい三角帽をちよいと投げてひよいと受けたら禿頭。
 あつち向いちやくうるくる、
 こつち向いちやくうるくる、
 御愛嬌か、またしてもとんほがへり。

あそびめ

たはれをのかすのまにまに
じだらくにみをもちくづし、
おしろいをあをきひたひに
ねそべりてひるもさけのみ、
さめざめとときになみだし、
ゆふかけてさやぎいづとも、
かなしみはいよよおろかに、
あはれよのしろきねどこの
まくらべのペコニヤのはな。

ながねがひいよよつめたし。

南京さん

李さん、鄭さん、支那服さん、
あなたの眼鏡はなぜ光る、
涙がにじんで日に光る。
鳥屋の硝子も日に光る。
目白、カナリヤ、四十雀、
鶉に文鳥に黒鶉、
鳥もいろいろあるなかに
おかめ鸚哥はおどけもの
焦れて頓狂に啼きさけぶ。
さてもいとしや、しをらしや、
けふも入日があかあかと

わかい南京ナシキさんは涙顔。

蝮捕り

旅のすがたの蝮捕り。
紺の脚絆に紺の足袋、
紺の小手あて、盲縞。
羽織、腹掛しやんとして草鞋つつかけ忍びあし。

わかい男の忍びあし、
まがひバナマに日が射せば、
苦みばしつた横顔のことにつやつや蒼白く、
ほそく割いたる青竹に蝮挟みてなつかしく、
渚のほとり、草土手の曼珠沙華さくしたみちを、

九月午後、忍びあし。

静かにゆるき潮鳴は、
夏と秋との伴奏、
五十三次、廣重の海の匂もまだ熱く、
眉にかがやく忍びあし、……
蝮の腹もいと青く。

けふのこの日の蝮捕り、――
渡りあるきの生業の昨日の疲れ、
明日の首尾、
案じわづらふ足もとに飛んで跳ねたはきりぎりす。
疲れた三味が鳴るわいな。

意氣な年増の手ずさみか、
取り残された避暑客の後の一人の爪弾か、
離縁られた人か、死ぬ人か、
思ひなしかは知らねども、
昨日あがつた心中の男女の忍び泣き、…
あれ三味が鳴る、晝日なか、
知らぬ都のふしまはし。

わかい吐息の忍びあし、
そつと留めて、聞惚れて、なにをおもふや、うつとりと、
蝮の腹の青縞の博多帯めくつややかさ、
きゆつきゆと白き指つけて、拭きつ、さすりつ、薄笑み

つ、
九月、午後、日の光――

こころの縞もいと青く。

蝮よ、蝮よ、やはらかな、熱い冷たい手觸りの、
そなたも三味にきき惚れて身をうねらすや、やるせなく、

平首、竹に挟まれて、されどゆかしく、あどけなく、
無心に腫る眼のいろは空と海との水あさぎ。
蝮よ小さい尾のさきの、匂の肌をつまぐれば、
毒ある汗はいきいきと、神經のごと細やかに、
朱の斑なまめく禍と黄の波斯模様の美しくしさ、
それか、怪しき淫れ女の
閨の麝香の息づかひ。

九月午後、日の光――

雪と花火

あれ三味が鳴る、きりぎりす、
飛んで死んだがましきいな。

夜ふる雪

蛇目の傘にふる雪は
むらさきうすくふりしきる。

空を仰げば松の葉に
忍びがへしにふりしきる。

酒に酔うたる足もとの
薄い光にふりしきる。

拍子木をうつはね幕の
遠いところにふりしきる。

思ひなしかは知らねども
見えぬあなたもふりしきる。

河岸の夜ふけにふる雪は
蛇目の傘にふりしきる。

水の面にその陰影に
むらさき薄くふりしきる。

酒に酔うたる足もとの
弱い涙にふりしきる。

聲もせぬ夜のくらやみを

ひとり通ればふりしきる。

思ひなしかはしらねども
こころ細かにふりしきる。

蛇目の傘にふる雪は
むらさき薄くふりしきる。

柳の左和利

ほの青い雪のふる夜に、
電車みちを、
酔つて、酔つて、酔つぱらつてさ、ひよろひよると、
ふらふらと、凭れかかれば、硝子戸に。

Yoi!...Yoi!...Yoitona!...

ほの青い雪はふり、
店のなかではしんみりと柳の左和利、
酔つて、酔つて、酔つぱらつてさ、ふらふらと、
ひよろひよると首うちふれば太棹が...

Yoi!...Yoi!...Yoitona!...

ほの青い雪の夜の
蓄音機とは知たれど、きけばこの身が泣る。
酔つて酔つて酔つぱらつてさ、ひよろひよると、
ふらふらと投げてかかれば、その咽喉が...

Yoi!...Yoi!...Yoitona!...

ほの青い雪のふる
人ひとり通らぬこの雪に、まあ何とした、
酔つて酔つて酔つぱらつてさ、ふらふらと、
ひよろひよると、しやくりあぐれば誰やらが、
Yoi!...Yoi!...Yoi!...Yoi!...

春の鳥

鳴きそな鳴きそ春の鳥、
昇菊の紺と銀との肩ぎぬに。
鳴きそな鳴きそ春の鳥、
歌澤の夏のあはれとなりぬべき
大川の金と青とのたそがれに。
鳴きそな鳴きそ春の鳥。

かるい背廣を

かるい背廣を身につけて、
今宵またゆく都川、
戀か、りんきか、吊橋の
瓦斯の薄黄が氣にかかる。

薄あかり

銀の時計のつめたさは
薄らあかりのVIIの字に
君がこころのつめたさは
河岸の月夜の薄あかり。

薄いなさけにひかされて、けふもほのかに來は來たが、
心あがりのした男、何のわたしに縁がある。

空の光のさみしさは

薄らあかりのねこやなぎ、

歩むころのさみしさは

雪と瓦斯との薄あかり。

思ひ切らうか、切るまいか、そつと歸るか、何とせう。

いつそあの日のくちつけを後のゆかりに別れよか。

水のにほひのゆかしさは

薄らあかりの鴨の羽、

三味のねじめのゆかしさは
遠い杵屋の薄かり。

かるい背廣を身につけてじつと凝視^{みつ}むる薄あかり。
薄い涙につまされて、けふもほのかに來は來たが。

銀の時計のつめたさは

薄らあかりのVIIの字に、

君がこころのつめたさは

青い月夜の薄あかり。

戀か、りんきか、知らねども、ほんに未練な薄あかり。

思ひ切らうか、たづねよか、ええ何とせう、しよんがい
な。

金と青との

金と青との愁夜曲、
春と夏との二聲樂、
わかい東京に江戸の唄、
陰影と光のわがこころ。

雨あがり

やはらかい銀の毬花の、ねこやなぎのほふやうな、
その濕つた水路に短艇はゆき、
書割のやうな杵屋の
裏の木橋に、

紺の蛇目傘をつほめた、
つつましい素足のさきの爪革のつや、
薄青いセルをきた筵若の
それしやらしいたたずみ……

ほんに、ほんに、
黄いろい柳の花粉のついた指で、
ちよいと今晩は、
なにを弾かうつていふの。

心中

あはれなる心中のうはさより
わが靈は泣き濡れてかへりゆく。

花つけしアカシヤの並木のかげを、
 嬋やかなる七月のおとづれのごとく。

やすらかに平準へいすんられしところは
 あるものの拵おきへのかけにありて、
 つねにかかる微顫みかたをこそぞみたれ。
 いみじく幽かなるその「レイト」よ。

附つきやすき花粉かふんのしめりのごとく、
 そはまた匪まいたの汗のごとくに顫かたへやすし。
 護ご謨り輪わのゆけばためらひ、
 吊橋たしはしの淡黄たんわうなる瓦斯がすのもとを泣きゆく。

新道しんみちを抜けては

榊さかきの芽のむせびをあはれみ、
 御神燈ごしんとうのかけをば
 それしやの浴衣ゆかたともすれちがふ。

とある河岸かたがしのおでんやには
 寄席よせのピラひらのかなしく
 薄汗うすあせの光る紙しに
 水菓子みづがしの色透すくがいとほし。

あはれなる心中こころのうはさより
 わが靈たまは泣き濡ぬれてかへりゆく、
 微風みかぜの吹くままに過ぎゆく
 嬋めづやかなる七月のおとづれのごとく。

花火

五〇四

花火があがる、
銀と緑の孔雀玉……パツとしだれてちりかかる。
紺青の夜の薄あかり、
ほんにゆかしい歌麿の舟のけしきにちりかかる。

花火が消ゆる。

薄紫の孔雀玉……紅くとろけてちりかかる。

Toron……tonton……Toron……tonton……

色とにほひがちりかかる。
兩國橋の水と空とにちりかかる。

花火があがる。
薄い光と汐風に、
義理と情の孔雀玉……涙しとしとちりかかる。
涙しとしと爪弾の歌のところにちりかかる。
團扇片手のうしろつきつんと澄ませど、あのやうに
舟のへさきにちりかかる。

花火があがる、
銀と緑の孔雀玉……パツとかなしくちりかかる。
紺青の夜に、大河に、
夏の帽子にちりかかる。
アイスクリームひえびえとふくむ手つきにちりかかる。
わかいところの孔雀玉、
ええなんとせう、消えかかる。

五〇五

紫陽花

かはたれに紫陽花の見ゆるこそさみしけれ。
うらわかき盲人のいろ飽まで白く、
そのほとりに頬を寄するは――
かろくかさねし手のひらの弾く爪さき、それとなく、
隆達ぶしの唱歌など思ひ出づるはいとかなし。

誰かつくりし戀のみち、いかなる人も踏み迷ふ……
よしやわれにも情あれ。寮の日くれの、あ、もの憂や、
何とせうぞの。蝸の金の線條顫はす聲も、
縁さへあらば、またの夕日にチレチレ
またの夕日に時雨るる。

おはぐるどぶのかなしみは
岐卓提燈のかけうつる茶屋のうしろのながし湯の
石鹼のほひ、微の花、青いとんほの眼の光。

よひやみの、よひやみの、
いづこにか、赤い花火があがるよの、
音はすれども、そのゆめは
見えぬころにくづるる……

ほのかにも紫陽花のはな咲けば、
新にかけし撒水の
香のうつりゆくしたたり、
さて、消えやらぬ間の片戀。

カナリヤ

たつた一言きかしてくれ。
カナリヤよ。

たんぼぼいろのカナリヤよ。

ちろちろと飛びまはる。ほんに浮氣なカナリヤよ。

おしやべりのカナリヤよ。

たつた一言きかしてくれ。

丁度、弾きすてた歌澤の。

三の絃の消ゆるやうに。

「わたしはあなたを思つてる。」と。

彼岸花

憎い男の心臓を

針で突かうとした女、

それは何時かのたはむれ。

晝寢のあとに、

ハツとして、

けふも驚くわが疲れ。

憎い男の心臓を

針で突かうとした女、――

もしや棄てたら、キツとまた。

どうせ、濕地の

彼岸花、

蛇がからめば

身は細そる。

赤い、濕地の

彼岸花、

午後の三時の鐘が鳴る。

もしやさうでは

もしやさうではあるまいかと
思うても見たが、

なんの、そなたがさうである、
このやうなやくざにと、——
胸のそこから血の出るやうな
知らぬ偽いつはりいうて見た。

雪のふる日に
赤い酒をも棄てて見た。
知らぬふりして、
ちんからと
鳴らしたその手でさかづきを。

片足

花が黄色で、芽がしよほしよほで、

見るも汚ない梅の木に
 小鳥とまつて鳴くことに、——
 あれ、あの雪の麥畑の、つもつた雪のその中に、
 白い女の片足が指のさきだけ見えて居る。

はつと思つて佇めば、

小鳥逃げつつ鳴くことに、——

何時か憎いと思ふたくせに、

卑怯未練な、安心さしやれ、

あれは誰かの情婦でもなけりや、

女乞食の兒でもない。

一軒となりの左右衛門どんの

啞の娘が投げすてた白い人形の片足ぢや。

あらせいとう

人知れず袖に涙のかかるとき、
 かかるとき、

ついで見馴れぬよその子が

あらせいとうのたねを取る。

丁度誰かの爲るやうに

ひとり泣いてはたねを取る。

あかあかと空に夕日の消ゆるとき、

植物園に消ゆるとき。

あかい夕日に

銀座の雨

あかい夕日に、のい、つまされて、
酔うて珈琲店を出は出たが、
どうせわたしはなまけもの
明日の墓場をなんで知る。

銀座の雨

雨……雨……雨……

雨は銀座に新らしく

しみじみとふる、さくさくと、

かたい林檎の香のごとく、

舗石の上、雪の上。

黒の山高帽、獵虎の毛皮、

わかい紳士は濡れてゆく。

蝙蝠傘の小さい老婦も濡れてゆく、

黒の喪服と羽帽子。

如いた娘の蛇目傘。

しみじみとふる、さくさくと、
雨は林檎の香のごとく。

はだか柳に銀緑の

冬の瓦斯點くしほらしさ、

棚の硝子にふかぶかと白い毛物の春支度。

肺病の子が肩掛の

弱いためいき。

彼斯の絨氈、

洋書の金字は時雨の靈、

Henri De Regnier が曇り玉、

息ふきかけてひえびえと

雨は接吻のしのびあし、

さても緑の、寶石の、時計、磁石のわびごころ、

わかいロテイのものおもひ。
 絶えず顫へていそしめる
 お菊夫人の縫針の、人形ミシンのさざめごと。
 雪の青さに片肌ぬぎの
 たほもつやめく髪かみの型、つんとすねたり、かもじ屋に、
 紺は匂ひて新らしく。
 白いピエロの涙顔。
 熊とおもちやの長靴は
 児供ごころにあこがるる
 サンタクロスの贈り物。
 外はしとしと淡雪あゆみゆきに
 沁みて悲しむ雨の絲。

雨は林檎の香のごとく

しみじみとふる、さくさくと、
 扉びらを透すかしてふる雨は
 Verlaino の涙雨、
 赤いコツプに線すぢを引く、
 ひとり顫へてふりかくる
 辛い胡椒かすに線すぢを引く、
 されば聲出す針はりの尖すみ、蓄音器屋かきこもりやにチカチカと
 廻まわるかなしさ、ふる雨に
 酒屋さかの左和利、三勝もそつと立ちぎく忍び泣き。
 それもさうかえ淡雪あゆみゆきの
 光るさみしさ、うす青さ、
 白いショウルを巻きつけて
 鳥も鳥屋とりやに涙する。
 椅子も椅子屋いすやにしよんほりと

白く寂しく涙する。
 猫もしよんほり涙する。
 人こそ知らね、アカシヤの
 性の木の芽も涙する。

雨：…雨：…雨：…

雨は林檎の香のごとく

冬の銀座に、わがむねに、

しみじみとふる、さくさくと。

雪

雪でも降りさうな空あひだね、今夜も
 ほら、もう降つて来たやうだ、その薄い色硝子を透かし

て御覧。

なつかしい圓弧燈に眞白なあ羽蟲のたかるやうに

細かなセンチユアルな悲しみが、向ふの空にも、

橋にも柳にも、

水面にも、

書割のやうな遠見の、黄色い市街の燈にも、

多分冷たくちらついてゐる筈だ。それとも積つたかしら。

幽かな囁き：…幽かなミシンの針の

薄い紫の生絹を縫うて刻むやうな、

色澤のある寂しいリズムの閃めきが、

そなたの耳にはきこえないのか：…湯から上つて、

もう一度透かして御覧、乳房が硝子に慄へるまで。

曇つたのほせさうな湯殿に、

白い湯気のなかに、
 螢が飛ぶ：：：燐のほひの螢が、
 ほうつほうつと：：：あれ銀杏がへしの
 つんと張つた鬢のうらから
 肩から、タオルからすべつて消える。
 ほうつほうつと。

さうではない、さうではない、
 すらりとした腕のほそ腕から、
 手の指の綺麗な爪さきの線まで、
 何かしら石鹼が光つて見えるのだ、さうして
 魔氣のふかい女の素はだかの感覚から
 忘れた夏の記憶が漏電する。
 ほうつほうつと螢が光る。

不思議な晩だ、まだ缺を取つたまま、
 何時までも足の爪を剪つてゐるのか、お前は
 泊芙藍湯の温かな匂から、
 香料のやはらかなけきから、
 おしろいから、
 夏の日のゆめも美しく
 女は踊る、なつかしいDancer

雪がふる：：：降つてはつもる：：：
 しめやかな悲しみのリズムの
 しんみりと夜ふけの心にふりしきる
 ほうつほうつと、螢が飛ぶ：：：
 あれごらんな、綺麗なこと、
 青、黄、緑、：：：さうしてうすいむらさき、

雪がふる……降つてはつもる……
 そつとしておきき、何處かでしめやかな三味線が、
 あれ、もう消えて了つた、鳴いたのは水鳥かしら、
 硝子を透してごらん、小さな赤い燈が
 ゆつくらと滑つてゆく、河上の方に
 紀州の蜜柑でも積んで來たのかしら……
 何だか船から喚んでるやうな……
 ひつそりとしたではないか、
 もう一度、その薄い硝子からのぞいて御覽、
 恐らく紺いろになつた空の下から、
 遠見の屋根が書割のやうに
 白く青く光つて
 疲れた千鳥が静な水面に鳴いてる筈だ。
 サラリとその硝子を開けて御覽……

スツカリ雪はやんで
 星が出た、まあ何て綺麗だらうねえ、
 あれ御覽、眞白だ、眞白だ。
 まるでクリスマススの精靈のやうに、
 ほんとに眞白だねい。

冬の夜の物語

女はやはらかにうちうなづき、
 男の物語のかたはしをだに聴き逃さじとするに似たり。
 外面にはふる雪のなにごともなく、
 水仙のパツチリとして匂へるに薄荷酒青く揺けり。
 男は世にもまめやかに、心やさしくて、
 かなしき女の身の上になにくれとなき温情を寄するに似

たり。
 すべて、みな、ひとときのいつはりとは知れど、
 互みになつかしくよりそひて、
 ふる雪の幽かなるけはひにも涙ぐむ。

女はやはらかにうちうなづき、
 湯沸のおもひを傾けて熱き熱き珈琲を搔きたつれば、
 男はまた手をのべてそを受けんとす。
 あたたかき暖爐はしばし息をひそめ、
 ふる雪のつかれはほのかにも雨をさそひぬ。

遠き遠き漏電と夜の月光。

キヤベツ畑の雨

冷びえと雨が、さ霧にふりつづく
 キヤベツのうへに、葉のうへに、
 雨はふる、冬のはじめの乳緑の
 キヤベツの列に、葉の列に。

あまつさへ、柵の網目の鐵條に
 白い鳥奴が鳴いてゐる。
 雨はふる、くぐりぬけてはいきいきと、
 色と匂を嗅ぎまはる。

ささやかな水のながれは北へゆく。

キャベツのそばを、葉のしたを。
雨はふる、路もひとすぢ、川下の
街も新らし、石の橋。

キャベツ畑のあちこちに
かがみ、はたらき、ひとかかえ
野菜かついではしるひと、
雨はふる。けふもあをあを夏帽子。

小父さんが来る、眞蒼に、脚も顫へて、
お早うがんです。山楮子の芽もこはごはと
泥にまみるる。立ちばなし。
雨はふる。しつかと握る水薬の黄色の蠟の鮮やかさ。

「阿魔つ子がね、昨夜さ、
いいらぶつ吃驚けた眞似仕出かし申してのお前さま。」
雨はふる。光つては消ゆる、剃刀で
咽喉を突いた女の頬。

「だけんどうかかうか生きるだらうつて、
醫者どもも云やんしたから。」まづは安心と軍鶏屋の小父
さん、
胸をさすればキャベツまで
ほつと息する葉の光。

鳥が鳴いてる……冬もはじめて眞實に
雨のキャベツによみがへる。
濡れにぞ濡れて、眞實に

色も匂もよみがへる。

新らしい、しかし、冷たい朝の雨、

キヤベツ畑の葉の光。

雨はふる。生きて滴る乳緑の

キヤベツの涙、葉のにほひ。

蕨

春と夏とのさかひめに
生絹めかしてふる雨は
それは「四月」のしのびあし、
過ぎて消えゆく日のうれひ。

蕨の青さ、つつましさ、
花か、巻葉か、知らねども、
その芽の黄さ、新らしさ……
庭の井戸から水揚けて、
しみじみと撰る手のさばき、
見るもさみしや、ふる雨に。

ひとり庭のかたすみ、
印半纏着てかがみ、
ひとりほそき角柱、
しんぞ寥しう手をあてて、
朝のつかれの身をもたす
古い宿場の青樓。

しとしとしとふる雨に
柱時計の羅馬字も
蓋も冷たし、しらじらと
針のIXを差すその面。

ひとりさらさら水あけて、
さつと蕨の芽にそそぎ、
ひとりはじめと眼をふせて、
揚枝つかへり弊私的里の
朝のつかれの身だしなみ。

空と海との燻し銀、
けふの曇りにふる雨は
それは涙のしのびあし、

青い臺場の草の芽に
沁みて「四月」も消えゆくや、
帆かけた船も、白鷺も
ましてさみしやふる雨に。

もののあはれにふる雨は、
さもこそあれや、早蕨の
その芽に莖に渦巻きて
はやも「五月」は沁むものを
なにかさみしきそのおもひ。

春と夏のさかひめに
生絹めかしてふる雨は
それは「四月」のしのびあし、

過ぎて消えゆく日のうれひ。

涙

蒼ざめはてたわがこころ、
こころの陰のひとすぢの
神経の絃そのうへに、
薄明のその絃に、

薄明のその絃に、
ちらと光りて薄青く、
踊るものあり、豆のごと……
雨は涙とふりしきる。

見れば小さな緑玉、
ひとのすがたのびいどろの、
頬にも胸にもふりしきる、
涙……かなしいその眼つき。
聲もえたてぬ奇しさは
夜半に「秘密」の抜けいでて、
所作になけくや、ただひとり、
パントミイムの涙雨。

月の出しほの片あかり、
薄き足もつびいどろの、
肩に光れどさめざめと、
歎き恐れて、夜も寝ねす。

金のピアノの鳴るままに、
濡れにぞ濡るれすべもなく、
神経の上、絃のうへ、
雨は涙とふりしきる。

新生

新らしい眞黄色な光が、
濕つた灰色の空——雲——腐れかかつた
暗い土蔵の二階の窓に、
出窓の白いフリジアに、髓の髓まで
くわつと照る、照りかへす。眞黄色な光。

眞黄色だ眞黄色だ、電線から
忍びがへしから、庭木から、倉の鉢まきから、
雨滴が、憂鬱が、眞黄に光る。
黒猫がゆく、
屋根の廂の日光のイルミネエション。

ぼたぼたと塗りつける雨、
神経に塗りつける雨、
靈魂の底の底まで沁みこむ雨
雨あがりの日光の
鬱悶の火花。

眞黄だ……眞黄な音楽が
狂犬のやうに空をゆく、と同時に

俺は思はず飛びあがつた、驚異と歎喜に
野蠻人のやうに聲をあけて
匍ひまはつた：：真黄色な灰色の室を。

女には兒がある。俺には俺の
苦しい矜がある、藝術がある、而して欲があり、熱愛が
ある。

古い土蔵の密室には
塗りつぶした裸像がある、妄想と罪惡と
すべてすべて真黄色だ。――
心臓をつかんで投げ出したい。

雨が霽れた。
新らしい再生の火花が、

重い灰色から變つた。
女は無事に歸つた。
ぼたぼたと雨だれが俺の涙が、
真黄色に真黄色に、
髓の髓から渦まく、狂犬のやうに
燃えかがやく。

午後五時半。

夜に入る前一時間。
何處で投げつけるやうな
あかんほの聲がする。

四十四年の春から秋にかけて自分の間借りして居た旅館の一室
は古い土蔵の二階であるが、元は待合の密室で一面に春畫を描

いてあつたそうな、それを塗りつぶしてはあつたが少しづつくづれかかつてゐた。もう土蔵全體が古びて雨の日や地震の時の危ふさはこの上もなかつた。

黄色い春

黄色、黄色、意氣で、高尚で、しとやかな
 棕梠の花いろ、卵いろ、
 たんぽぽのいろ、
 または兒猫の眼の黄いろ……
 みんな寂しい手ざはりの、岸の柳の芽の黄いろ、
 夕日黄いろく、粉が黄いろくふる中に、
 小鳥が一羽鳴いてゐる。
 人が三人泣いてゐる。

けふもけふとて紅つけてとんほがへりをする男、
 三味線弾きのちび男、
 俄盲目のものもらひ。

街の四辻、古い煉瓦に日があたり、
 窓の日覆に日があたり、
 粉屋の前の腰掛に疲れ心の日があたる、
 ちいちいほろりと鳥が鳴く。
 空に黄色い雲が浮く、
 黄いろ、黄いろ、いつか夢見た風も吹く。

道化男がいふことに
 「もしもし淑女、とんほがへりを致しませう、
 美しいオフエリヤ様、

サロメ様、

フランチエスカのお姫様。」

白い眼をしたちび男、

「一寸、先生、心意氣でもうたひやせう」

俄盲目も後から

「旦那様や奥様、あはれな片輪で御座います、

どうぞ一文。」

春はうれしと鳥も鳴く。

夫人、

美しい、かはい、いとやかな

よその夫人、

御覽なさい、あれ、あの柳にも、サンシユにも

黄色い木の芽の粉が煙り、

ふんわりと沁む地のにほひ。
ちいちいほろりと鳥も鳴く、
空に黄色い雲も浮く。

夫人、

美しい、かはい、いとやかな

よその夫人、

それではね、そつとここらでわかれますう。
いくら行つてもねえ。

黄色、黄色、意氣で高尚で、いとやかな、

茴香のいろ、卵いろ、

「思ひ出」のいろ、

好きな兒猫の眼の黄いろ、

浮雲のいろ、
ほんにゆかしい三味線の、
ゆめの、夕日の、音の黄色。

汽車はゆくゆく

汽車はゆくゆく、二人を載せて、
空のはてまでひとすぢに。
今日は四月の日曜の、あひびき日和、日向雨、
塵にまみれた桜さへ、電線にさへ、路次にさへ、
微風が吹く日があたる。
街の瓦を噉下ろせばたんぼぼが咲く、鳩が飛ぶ、
煙があがる、ぐわんしやんと暗い工場の槌が鳴る
なかにをかしな小屋がけの

によつきりとした野呂間顔。
青い布かけ、すつほりと、よその屋根からにゆつと出て
両手つん出す彌次郎兵衛姿、
あれわいさの、どつこいしよの、堀抜工事の木造の車、
手をふる、手をふる、首をふる——
わしとそなたは何處までも。

汽車はゆくゆく、二人を乗せて
都はづれをひとすぢに。
鳥が鳴くのか、一寸と出た龜井戸驛の驛長も
芝居がかりに戸口からなにか恍然もの案じ、
柵に載つけたシネリヤ、
紫の花、鉢の花、色は日向に陰影を増す。
悪戯者の兒守さへ、けふは下から真面目顔、

ふたつ並べたその鼻の孔あなに、眇眼めうがんに、まだ齒も生えぬ
 ただ揉みくちやの泣面のべそかき小僧が口の中
 蒸氣噴きつけ、慕進ぼしん、パテー會社の映畫の中の
 汽車はゆくゆく、——空飛ぶ鳥の
 わしとそなたは何處までも。

汽車はゆくゆく、二人を乗せて

廣い野原をひとすぢに。

ひとりそはそは、くるりくるくる、水車みづぐるま

廻る畑のどぶどろに

葱のあたまがとんほがへりて泳ぎゆく、

ちびの菜種の眞黄いろ

堀に曳きずる肥舟の重い小腹にすられゆく。

さても笑止や、垣根のそとで

障子張るひと、椿の花が上に眞赤に輝けば

張られた障子もくわつと照る、

鳥勘左衛門、鳥啼かせてくわつと吹く

よかよか飴屋のちやるめらも

みんなよしよし、粉糞こなごやつこらさと擔いで、

禿けた粉屋も飛んでゆく。

蒸氣噴き噴き、斜ななめに

汽車はゆくゆく、椿が光る。

わしとそなたは何處までも。

汽車はゆくゆく二人を乗せて

空のはてまでひとすぢに。

硝子窓から微風入れて、

煙草吹かして、夕日を入れて、

知らぬ顔して、さしむかひ、
下ぢや、ちよいと出す足のさき
ついと外せばきゆつと踏む、
雲のためいき、白帆のといき
河が見えます、市川が。
汽車はゆくゆく、——空飛ぶ鳥の
わしとそなたは何處までも。

梨の畑

あまり花の白さに
ちよつと接吻をして見たらば、
梨の木の下に人がゐて、
こちら見ては笑うた。

梨の木の毛蟲を
竹ぎれでつつき落し、
つつき落し、
のんびり持った喇叭で
受けて廻つては笑うた、
しよざいなやの、
梨の木の畑の
毛蟲探のその子。

*紙製の喇叭見たやうなもの

河岸の雨

雨がふる、緑いろに、銀いろに、さうして薔薇いろに、
薄黄に、

絹糸のやうな雨がふる、
うつくしい晩ではないか、濡れに濡れた薄あかりの中に、
雨がふる、鐵橋に、町の燈火に、水面に、河岸の柳に。

雨がふる、啜泣きのやうに澄みきつた四月の雨が
二人のところにふりしきる。
お泣きでない、泣いたつておつつかない、
白い日傘でもおさし、綺麗に雨がふる、寂しい雨が。

雨がふる、憎くらしい憎くらしい、冷たい雨が、
水面に空にふりそそぐ、まるで汝の神経のやうに。
薄情なら薄情におし、薄い空氣草履の爪先に、
雨がふる、いつそ殺してしまひたいほど憎くらしい汝の
髪の毛に。

雨がふる、誰も知らぬ二人の美しい秘密に
隙間もなく悲しい雨がふりしきる。
一寸おきき、何處かで千鳥が鳴く、歌私的里の靈。
濡れに濡れた薄あかりの新内。

雨がふる、しみじみとふる雨にうち連れて、雨が、
二人のところが啜泣く、三味線のやうに、
死にたいつていふの、ほんとにさうならひとりでお死に
およしな、そんな氣まぐれな、嘘つばちは。私はいやだ。

雨がふる、緑いろに、銀いろに、さうして薔薇色に、薄
黄に、
冷たい理性の小雨がふりしきる。

お泣きでない、泣いたつておつつかない、
どうせ薄情な私だちだ、絹糸のやうな雨がふる。

薄荷酒

「思ひ出」の頁に

さかづきひとつうつして、
ちらちらと、こまごまと、
薄荷酒を注げば、
緑はゆれて、かけのかけ、仄かなわが詩に啜り泣く、
そなたのこころ、薄荷さけ。

思ふ子の額に
さかづきそつと透かして、
ほれほれと、ちらちらと、

薄荷酒をのめば、
緑は沁みて、ゆめのゆめ、黒いその眸に啜り泣く、
わたしのこころ薄荷さけ。

白い月

わがかなしきソフイーに。

白い月が出た、ソフイー。
出て御覽、ソフイー。
勿忽草のやうな
あれあの青い空に、ソフイー。

まあ、何んて冷つこい
風だらうねえ、

出て御覽、ソフイー！
綺麗だよ、ソフイー！。

いま、やつと雨がはれた——

緑いろの廣い野原に、

露がきらきらたまつて、

日が薄うすすりと光つてゆく、ソフイー！。

さうして電話線の上にね、ソフイー！。

びしょ濡れになつた白い小鳥が

まるで三味線のこまのやうに留つて、

つくねんと眺めてゐる、ソフイー！。

どうしてあんなに泣いたの、ソフイー！。

細かな雨までが、まだ、

新内のやうにきこえる。ソフイー！。

——あの涼しい楡の新芽を御覽。

空いろのあをいそらに、

白い月が出た、ソフイー！。

生きのこつた心中の

ちやうど片われでももあるやうに、

芥子の葉

芥子は芥子ゆる香もさびし。

ひとが泣かうと泣くまいと

なんのその葉が知るものぞ。